

島田正治

”天変地異”という語がある。これは日本に限ったことでなく、どうも世界のあちこちで起きているようである。そして、このメキシコのチャパラでも異変がある。というのも、この十年以上にわたって、チャパラ湖の水が減る一方で、このままいったら、あと十年もすれば湖が枯渇するのではないかとあれこれ心配もされた。何年か前、雨乞いの集いが催されたり、なんとかして水を呼び戻したいという願いがつついた。沖あい千米ぐらいまで水際が引いた。ところが去年の雨期にはかなりの雨が降ってみなよろこんでいたが、今一步、まだまだという感があった。

\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*

ところが、今年になって一挙に水量が六十パーセントふえたというのである。従来だと浜辺に沿って歩道が一本か二本あった。それがすでに水で埋ってしまい、歩けなくなってしまった。わたしなど、この浜辺こそが仕事場のひとつだのに、描きに行って道具をひろげて描く場所がない。ようやく見つけて、つぎの日、再び行ってみると、そこはもう水びたしで描く場所すらなくなっていた。このままいくと、きっと来年も水が増えてくるだろうと村の人たちは言っている。浜辺を利用して作っていたとうもろこしも水びたしのせいで黄色く枯れてしまい全滅、湖の水をひいて作っていたチャヨテ畠もみなだめになってしまっている。水が増えたことをよろこんでいる一方で悲劇もある。

その異変のひとつに、今、わたし共が住んでいるところは、どちらかという湖岸に近い。といっても歩いて百米以上あるが、この住宅の敷地内のあちこちから水が湧き出しはじめた。これには驚いた。小学校の校庭ほどの広さはある。その半分ぐらいが水びたし状態である。それも、今から何百年前は湖の一部だったような気もする。どうりで樹木が繁茂するはずだ。

\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*\_\_\*

このところ、毎日歩いて浜辺を見にいった観察している。水際に一本棒を立てて帰ってくる。次の日行くと確実に水がふえているのがわかる。これを見て、少し不安になってきたのもほんとうである。わたしの予想したように、浜辺の家が水で埋まるのではないかと。日本の琵琶湖の三倍もあるといわれるチャパラ湖、一センチメートル水位が上がったとしたら、水量は一体どのくらいということになるか。

浜辺で描いていて、ふと水の中を見ると、澄んだ水にたくさんの稚魚が群れをなして泳いでいた。野鳥も戻ってきたようである。湖からは、鯉、なまず、その他小魚がたくさん取れる。しかし、湖が汚染されて、その魚もあまり食べなくなった。

・・・・次号につづく

※ご意見・ご感想は  
右上メールボタンよりお送りください。